

香川県立保健医療大学リポジトリ

看護学生の自己効力感と小児看護学実習前の自己評価との関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 舟越, 和代, 小川, 佳代, 三浦, 浩美 メールアドレス: 所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/149

看護学生の自己効力感と小児看護学実習前の 自己評価との関連

舟越 和代*, 小川 佳代, 三浦 浩美

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

Association between Perceived Self-Efficacy and Self-Rating before Pediatric Nursing Practice in Nursing Students

Kazuyo Funakoshi, Kayo Ogawa, Hiromi Miura,

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

要旨

本研究の目的は、看護学生（短期大学3年生44名）の自己効力感と小児看護学実習前の自己評価との関連を明らかにし、実習前面接の指導の示唆を得ることであった。

自己効力感が低い学生は、実習において家族との関係づくりや技術の実践場面、カンファレンスへの意欲的な参加等に自信が持てない可能性があった。実習前の面接では、具体的な解決策をともに考え確認する等の指導が必要である。

Key Words: 看護学生 (nursing students), 小児看護学実習 (pediatric nursing practice), 自己効力感 (self-efficacy), 自己評価 (self-rating)

*連絡先：〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 舟越 和代

*Correspondence to: Kazuyo Funakoshi, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

序 文

今日、看護基礎教育においては、複雑で多様な保健・医療・福祉の問題に対応できる人材の育成が望まれており、そのための教育方法の開発が必要とされている^{1, 2)}。特に小児看護学実習では、学生が子どもを苦手と捉え、自ら主体的に関わりを持ち課題に取り組もうとする行動が少なくなっていることが問題となっている^{3, 4)}。学生は、専門的知識や技術の習得の過程で個々の課題や問題から逃げるのではなく、課題達成に向けて努力する強い意思力や問題解決能力が必要とされ、実習教育においては、その育成方法の検討が課題といえる。

Bandura⁵⁾は、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知をSelf-efficacy（以下自己効力感）とし、この自己効力感が行動の開発や意欲を向上させると述べている。そして、この自己効力感とは、2つの水準で人間の行動に影響を及ぼすと考えられている。一つ目の水準は、特定場面の自己効力感の強さが、その特定場面における人の行動に影響を及ぼすというものであり、2つ目の水準は、長期的に個人の様々な場面の行動に影響を及ぼすというものである。坂野ら⁶⁾は、この2つ目の水準に着目し、個人がいかに多くの努力を払おうとするか、あるいは嫌悪的な状況にいかに長く耐えることができるかを決定する要因として自己効力感を測定できるように尺度を開発した。研究者らは、この第2水準の学生の自己効力感が、はじめて経験する小児病棟での実習場面の学生の行動に影響すると考えた。つまり、昨今の学生は子どもやその家族との関係づくりに困難やとまどいを感じているといわれている⁷⁾が、そういう状況でも自ら困難に立ち向かい、課題を達成しようとする主体的な意欲とこの自己効力感に関連していると考えた。そこで、臨地実習前に自己効力感の低い学生の状況を把握し、実習前の面接や臨地実習での指導に役立てようとしている。

実習前の面接は、教員と学生の個人面接で行っている。主たる目的は学生個々が自己学習課題を明確化できることである。そのために、学生が自己の達成すべき課題に気づき、言語化できるように導く手段のひとつとして自己評価表を用いている。自己評価表は、実習目的に沿って作成しており、学生には、面接までに自分がどこまで達成で

きと思うかについて考え、自己評価してくるよう伝え、それを元に面接している。その面接の際、学生の主体的な実習への取り組みにつながる意欲を導き出すために、自己評価表の状況と自己効力感を関連させて指導できるのではないかと考えた。

本研究の目的は、学生の行動の動機付けとなる自己効力感と実習前の自己評価との関連を明らかにし、小児看護学実習前の面接での指導の示唆を得ることである。

方 法

1. 研究対象者：短期大学3年次に小児看護学実習を履修した看護学生44名。
2. 研究期間：平成17年4月～11月。
3. 調査方法：小児看護学実習前に自記式質問紙調査を実施した。
4. 調査内容

1) 自己効力感：東條・坂野⁸⁾の一般性セルフ・エフィカシー尺度（General Self-Efficacy Scale）16項目を用いた（以下GSESとする）。この尺度は、「行動の積極性」7項目、「失敗に対する不安」5項目、「能力の社会的位置づけ」4項目の3つの因子で構成されている。それぞれ「YES」か「NO」で回答する。「YES」は1点、「NO」は0点で点数化される。

2) 実習前の自己評価：教員が独自に作成した小児看護学実習評価表を用いた。これは、「子ども・家族との関係づくり」4項目、「看護過程の展開」6項目、「技術の実践」5項目、「実習態度」8項目で構成されている。実習にあたってどこまで達成できると思うかという視点で「できる」4点～「できそうにない」1点の4段階で聞いた。

5. 分析方法

GSESは点数が高くなるほど自己効力感が強くなるように逆転項目の点数を変換した。GSESの3因子毎の合計得点、また16項目の合計得点と、自己評価の各項目毎の得点間でSpearmanの順位相関係数を求め関連を検討した。有意水準は5%とした。統計ソフトはSPSS14.0J for Windowsを用いた。

6. 倫理的配慮

GSESと自己評価は実習指導に役立てること、成績には影響しないことを文書と口頭で説明し、

研究の同意を文書で得られた学生のデータを分析対象とした。尺度の使用については事前に作成者に了承を得た。

結 果

1. GSESの得点

GSES16項目の合計得点は平均 5.4 ± 2.94 であった。因子毎では、「行動の積極性（7項目）」 2.7 ± 1.88 , 「失敗に対する不安（5項目）」 1.6 ± 1.37 , 「能力の社会的位置づけ（4項目）」 1.1 ± 1.06 であった。

2. 自己評価の得点

「子ども・家族との関係づくり」では, 「患児の年齢や発達段階を考慮した関わりができる」 2.5 ± 0.59 , 「患児の病状を考慮した関わりができる」 2.5 ± 0.70 , 「患児との関わりで観察したこと, 感じたことを適切に表現し, 客観的に判断できる」 2.5 ± 0.59 であった。「患児の母親および家族と関わることはできる」は 2.4 ± 0.66 で4項目中最も低かった。

「看護過程の展開」は, 6項目中最も得点が高かったのは「立案した計画に基づいてケアを実施できる」 2.5 ± 0.59 であり, 他の項目は平均値が $2.2 \sim 2.3$ で全体に低得点であった。

「技術の実践」は, 「患児の安全・安楽を考えケアを実践できる」 2.6 ± 0.61 が5項目中最も高く, 次いで「観察ができる」 2.5 ± 0.55 であった。「状況にあわせて技術の応用ができる」が最も得点が低く, 2.1 ± 0.47 であった。

「実習態度」は, 「遅刻・欠席・早退時の連絡・報告ができる」が 3.8 ± 0.44 で, 8項目中最も高得点であった。最も低得点だったのは「文献を活用し, 疑問や問題を主体的に解決しようとする」 2.6 ± 0.65 であった。

3. GSESと自己評価の関連

1) GSES全体と自己評価の関連

自己効力感全体と「関係づくり」では, 「患児との関わりで感じたことを適切に表現し, 客観的に判断できる」($p=.303$, $p=.046$), 「患児の母親および家族と関わることはできる」($p=.471$, $p=.001$)の2項目にやや～かなりの相関が認められた。年齢(発達段階)を考慮した関わりや病状を考慮した関わりとは相関関係が認められなかった。「技術の実践」では, 「児の観察ができる」($p=.301$, $p=.047$), 「児の状況にあわせて

技術の応用ができる」($p=.426$, $p=.004$)の2項目にやや～かなりの相関が認められた。「実習態度」では「看護学生としての適切な言葉づかいができる」($p=.321$, $p=.034$), 「意欲的にカンファレンスに参加し自分の意見が言える」($p=.358$, $p=.018$)の2項目とにやや相関が認められた。「看護過程の展開」と自己効力感には相関関係が認められなかった。

2) GSESの3因子と自己評価の関連

「行動の積極性」は, 「関係づくり」の「母親および家族と関わることはできる」($p=.342$, $p=.023$), 「技術の実践」の「児の状況にあわせて技術の応用ができる」($p=.312$, $p=.039$), 「実習態度」の「意欲的にカンファレンスに参加し, 自分の意見が言える」($p=.480$, $p=.001$)の3項目との間にやや～かなりの相関が認められた。

「失敗に対する不安」は, 「関係づくり」の「患児の病状を考慮した関わりができる」($p=.341$, $p=.023$), 「技術の実践」の「小児の観察ができる」($p=.322$, $p=.033$), 「児の状況にあわせて技術の応用ができる」($p=.322$, $p=.033$)の3項目との間にやや相関が認められた。

「能力の社会的位置づけ」は, 「関係づくり」の「患児の母親および家族と関わることはできる」($p=.361$, $p=.016$)の1項目のみ, やや相関が認められた。

以上の結果を表1に示した。

考 察

今回分析に使用したGSESは, 一般的な自己効力感の高さを評価するものである。東條・坂野⁸⁾の報告によると, 学生は成人に比べ一般的に自己効力感が低い傾向にあり, 今回の対象学生の自己効力感も平均 5.4 ± 2.94 で成人(9.59 ± 3.70)よりは低いが, その程度は一般学生の普通レベル(5～8)に位置していた。そして, この一般的な自己効力感の高さは, 短期間の実習では変化が期待できない傾向であるが, ある特定の状況の自己効力感については変化が期待できる⁹⁾。それは, もともと人に備わっている能力というより自分で実際に行ってみること, 他者の行動を観察すること, 自己教示や他者からの説得的な暗示, 生理的な反応の変化を体験してみることなどによって個人が作り出していくものである¹⁰⁾。看護学実習において, 事前の面接で学生の自己学習課題を具体

表1 看護学生の自己効力感と小児看護学実習前の自己評価との関連

n=44

自己評価項目		自己効力感			
		行動の積極性	失敗に対する不安	能力の社会的 位置づけ	全体
点数幅		0～7	0～5	0～4	0～16
平均値±標準偏差値		2.7±1.88	1.6±1.37	1.1±1.06	5.4±2.94
関係づくり	患児の年齢（発達段階）を考慮した関わりができる	2.5±0.59			
	患児の病状を考慮した関わりができる	2.5±0.70		0.341 0.023	
	患児との関わりで観察したこと、感じたことを適切に表現し、客観的に判断できる	2.5±0.59			0.303 0.046
	患児の母親および家族と関わる事ができる	2.4±0.66	0.342 0.023		0.361 0.016 0.471 0.001
看護過程の展開	枠組みに沿って系統的に情報収集し、分析・統合ができる	2.2±0.57			
	個別的な看護問題がわかり、優先度が判断できる	2.3±0.70			
	患児の健康レベルに適した長期目標を設定できる	2.3±0.53			
	現実的で達成可能な短期目標を設定できる				
	目標達成のために具体的で実施可能なケア計画が立案できる	2.2±0.55			
	立案した計画に基づいてケアを実施できる	2.5±0.59			
	実施の結果や患児や家族の反応を客観的に記述できる	2.2±0.60			
	評価に基づき、ケア計画を修正し活用できる				
技術の実践	小児の観察ができる（バイタルサイン測定含む）	2.5±0.55		0.322 0.033	0.301 0.047
	小児看護に必要な技術が実践できる	2.2±0.57			
	児の状況にあわせて技術の応用ができる	2.1±0.47	0.312 0.039	0.322 0.033	0.426 0.004
	治療・処置介助のポイントが理解できる	2.4±0.57			
	患児の安全・安楽を考え、ケアを実践できる	2.6±0.61			
	遅刻・欠席・早退時の、連絡・報告ができる	3.8±0.44			
	事前学習ができている	3.1±0.48			
実習態度	レポート・記録などの提出期限を守る	3.7±0.45			
	看護学生として適切な言葉づかいができる	3.3±0.69			0.321 0.034
	意欲的にカンファレンスに参加し、自分の意見が言える	2.9±0.66	0.480 0.001		0.356 0.018
	文献を活用し、疑問や問題を主体的に解決しようとする	2.6±0.65			
	メンバーの一員として協力している	3.3±0.59			
	医療チームの一員として自覚があり、適切な行動がとれる	3.1±0.52			

上段：Spearman順位相関係数 下段：p値

的に学生の言葉で明らかにする指導的介入は、自己教示や他者からの説得的な暗示となり、それが学生の実習への主体的な取り組みにも繋がると考

える。

今回の学生の自己効力感と実習前の自己評価との関連をみた分析結果から、関係づくりでは、自

己効力感が低い学生は、患児との関わり場面の言語化や客観的判断、また母親や家族との関わりにおいて、できないかもしれないと思う傾向があることがわかった。特に母親や家族との関わりは、自己効力感との相関が一番高い項目であった。下位因子毎にみると「行動の積極性」と「能力の社会的位置づけ」との関連が認められている。小児看護学実習の特徴として、対象者は子どもだけではないということが挙げられる。その母親や家族も含めた対象者へのケア実践が求められるが、他の領域の成人を対象とした看護学実習では体験できないことが多いため、自己効力感の低い学生は、家族との関係づくりへの取り組みに積極的な行動を起こせない可能性がある。また、「能力の社会的位置づけ」は、自分の知識や記憶力など能力の高さを聞いたものであり、自分自身の能力に否定的な学生は、よりいっそう経験の少ない事柄への取り組みについて消極的になることが予想される。実習前の面接では、既習の実習においての対象者との関わりの中で経験してきたことを学生の言葉で具体的にふり返らせながら、できたことを明らかにして、それが母親や家族との関わり場面にどう生かすことができるかを示唆していくような指導が必要と考える。

また、自己効力感が低い学生は、観察やバイタルサイン測定等の基本的な看護技術の実践とその応用ができないと思う傾向があることがわかった。これは、「失敗に対する不安」との関連が影響しており、失敗するかもしれないという不安感が、より技術実践への取り組み姿勢を消極的にする可能性がある。一方で「失敗に対する不安」は、患児の病状を考慮した関わりができないかもしれないという思いとも関連があった。患児の疾患や病状の理解ができていないことで、看護技術を実践するときに、できないかもしれないという不安が増強することが予想される。特に失敗に対する不安が強い学生には、実習前の面接で、学生の知識レベルを確認するとともに、実際の技術の実践場面で教員や臨床指導者にどうサポートして欲しいかを具体的に確認することが必要だと思われる。

「実習態度」では自己効力感が低い学生は看護学生としての適切な言葉づかいについて自信がなく、カンファレンスへの意欲的な参加に対しても消極的であることがわかった。小児看護学実習に限らず、実習場面では実習指導者や担当看護師と

の関わり場面は多く、あいさつや報告、連絡等学生としての姿勢は常に問われるところである。看護学生としての適切な言葉づかいについての自信のなさが、実習で求められる発言場面でうまく話せないのではないかという思いがあり、それが、カンファレンス場面での発言にも影響していることが予想される。

カンファレンスへの取り組みについては、自ら経験したこと、そこからの学びの言語化が十分にできないことも考えられるが、考えていても、積極的な活動が苦手であったり、何かを決定するときに迷いが生じる傾向が強ければ、自分の意見をタイミングよく述べるということは難しい。藤岡¹¹⁾は、これまでのさまざまな経験において、学生は言葉で語られるよりもはるかに多くのこと、深いことを学んでおり、それを学生自身が言葉で表現して確認できるように促すのが教員の役割であると述べている。実習前の面接においても、カンファレンスでの発言に自信がない学生には、それまでの看護学実習での経験を具体的に語らせ、語ったことの意味付けをしながら、どうすれば発言できるか、具体的な指標を示す等、学生自身が具体的な達成課題を述べるができるようにする指導が必要である。

「看護過程の展開」の自己評価は、自己効力感とは関連が認められなかった。しかし、自己評価は他の評価項目に比べ全体に低いので、実習前の面接では自信がない理由を具体的に聞いて、実習中の配慮を考えていく必要はあると考える。

以上自己効力感を指標に実習前の面接での教員の指導方法について検討した。この研究は短期大学の最終学年の学生を対象としているため、4年制大学の学生や、学年進行途中で実習に臨む学生への指導方法の検討が今後の課題である。

結 論

短期大学3年次看護学生44名の自己効力感と小児看護学実習前の自己評価との関連を明らかにし、以下の結果を得た。

自己効力感とは、患児との関わりで感じたことを適切に表現し、客観的に判断すること、母親および家族と関わることと関連があった。また、小児看護技術の実践では、バイタルサイン測定等基本的技術の実践やその応用、実習態度は、看護学生としての適切な言葉づかい、意欲的なカンファレ

ンスへの参加と関連があった。どれも自己効力感が低い学生ほど自信がない傾向にあった。

実習前の面接では、学生が過去の実習の体験を語ることを通して、学生の体験の意味づけをしながら、できたことや今後の課題を明確にすること、また、指導者への具体的な支援についての希望を確認すること等の必要性が示唆された。

文 献

- 1) 松野かほる (1996) 新しいカリキュラムに託したもの。看護展望 21 (6): 673-677.
- 2) 小林たつ子, 中谷千尋, 松本美富士, 北村愛子 (2006) 学生の看護実践能力を育む取り組み。看護教育 47 (4): 292-296.
- 3) 大木伸子, 濱中喜代, 日沼千尋 (1998) 小児看護学実習を問う。小児看護 21: 1950-1659.
- 4) 江本リナ, 長田暁子, 鈴木真知子, 安田恵美子 (1999) 小児看護学実習を行う学生に関する研究の動向と今後の課題。第30回日本看護学会論文集-看護教育-: 32-34.
- 5) Bandura. A. (1977) Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. Psychological Review 84 (2): 191-215.
- 6) 坂野雄二, 東條光彦 (1986) 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み。行動療法研究 12 (1): 73-82.
- 7) 西田みゆき, 北島靖 (2003) 小児看護実習における学生の困難感。順天堂医療短期大学紀要14: 44-51.
- 8) 東條光彦, 坂野雄二 (2001) セルフ・エフィカシー尺度, “心理アセスメントハンドブック” (上野一郎監修), 第2版, 西村書店, 東京, p425-434.
- 9) 佐々木和義 (2002) 看護教育, “セルフ・エフィカシーの臨床心理学” (坂野雄二, 前田基成編), 初版, 北大路書房, 京都, p146-156.
- 10) 坂野雄二 (2002) 人間行動とセルフ・エフィカシー, “セルフ・エフィカシーの臨床心理学” (坂野雄二, 前田基成編), 初版, 北大路書房, 京都, p5-6.
- 11) 藤岡完治, 堀喜久子 (2002) “看護教育の方法”, 第1版, 医学書院, 東京, p1-11.

Abstract

The purpose of this study was to clarify the association between perceived self-efficacy and self-rating before pediatric nursing practice in 44 nursing students in the 3rd year of a junior college, and to evaluate the significance of instructions given in the interview before practice.

There is a possibility that students with a low perceived self-efficacy will not have confidence in the establishment of connection with patients' families, practice of skills, and active participation in conferences. In the interview before nursing practice, instructions should be given so that both instructors and students can evaluate concrete solutions of these problems.

受付日 2006年10月31日
受理日 2007年1月15日